

〔文献〕

- 1) 櫛谷圭司「空間の“意味”の構造と構造主義の方法」人文地理36—3, 1984
- 2) コリングウッド著, 玉井治訳『思索への旅—自伝—』未来社, 1981
- 3) 千田稔訳編『地図のかなたに』地人書房, 1981, 11~12頁
- 4) 高毛潤二郎・江幡正彦「行動地理学への二つのアプローチ」地理25—11, 1980
- 5) 矢野司郎「Leonard Guelke: 地理学における歴史理論の理解—観念主義的研究方法—」人文地理36—3, 1984
- 6) 山野正彦「空間構造の人文主義的解読法—今日の人文地理学の視角—」人文地理31—1, 1979
- 7) Brown, I.: *Perception, theory and commitment*, Univ. of Chicago Press, 1977
- 8) Collingwood, R. D.: *Idea of history*, Oxford Univ. Press, 1961
- 9) Guelke, L.: 'Problems of scientific explanation in geography', *Can. Geog.* XV—1, 1971, pp. 38~51
- 10) Guelke, L.: 'Regional geography, *Prof. Geogr.*, XXIX—1, 1977, pp. 1~7
- 11) Guelke, L.: 'The roll of laws in human geography', *Prog. Hum. Geogr.*, 1—3, 1977, pp. 376~386
- 12) Guelke, L.: 'Geography and positivism' (Herbert, D. T. and Johnston, R. J. (ed.): *Geography and urban environment*, vol. 1, John Wiley, 1978, p. 35~61)
- 13) Guelke, L.: 'Idealist human geography?', *Area*, 11—, 1979, pp. 80~81
- 14) Guelke, L.: 'The idealist dispute in Anglo-American geography: a comment', *Can. Geog.*, XXVI—1, 1982, pp. 51~57
- 15) Harrison, R. T. and Livingstone, D. N.: 'There and back again—towards a critique of idealist human geography,' *Area*, 11—, 1979, pp. 75~79
- 16) Johnston, R. J.: *Philosophy and human geography*, Edward Arnold, 1983

菊地利夫著 日本歴史地理概説: 古今書院, 1984年, A5判, 280頁

本書は、一人の著者によってまとめ上げられた日本の歴史地理に関する概説書としては、初めての刊行物である。もちろん、これまでも日本の歴史地理に関する概説書が無かった訳ではない。しかしそれらは、いずれも複数の執筆者によって分担執筆された編さん書で、必ずしも編者の意図や理念が貫徹されていたとはいえなかった。

これに対し本書は、1958年に『新田開発』(上・下巻, 古今書院)を著わして歴史地理学者としての地位を確立し、1977年には『歴史地理学方法論』(大明堂)によって歴史地理学に対する考え方を世に問うた著者が、その理念を正面にかかげてまとめ上げた概説書であるという点に最大の特色がある。

本書の特徴として、著者自らが「はしがき」の中で列挙しているのは次の5点である。

① 従来の日本歴史地理が政治史の時代区分に従って叙述されてきたのに対し、本書では歴史地理学の本質にもとづいて時代区分を工夫し、過去の人々の環境知覚が異なる時期を画期とした。

② 従来の日本歴史地理の内容が日本国土の陸の歴史地理であったのに対し、本書では日本国土を陸からも海からも見て叙述し、日本を東アジアや世界の中において考察した。

③ 従来の日本歴史地理が過去の地理を客観的にみただけを叙述したのに加え、本書では過去の人々の生活空間のつくり方を過去の人々の心理—歴史心理—を理解して過去の地理を解釈した。

④ 従来の日本歴史地理では全国にわたるその地域構造について叙述することが少なかったのに対し、本書ではそれぞれの歴史地理について空間構造と空間過程に重点をおいて叙述した。

⑤ 従来の日本歴史地理は過去の地理をさまざまな叙述理論で述べており、本書でもまた、とり上げた過去の地理に応じてさまざまな叙述理論を用いたが、歴史心理から当時の人々がいかに空間を組織したかを、その事実から理解し、解釈するという観点は一貫してつらぬいた。

これらの諸点は単に本書の特徴というにとどまらず、著者が本書を構想し、執筆するにあたって立脚した基本的な立場であり、引いては著者の歴史地理学観を簡潔に表現したものということもできよう。以下本稿では、本書の論述の中でこれらの立場がど

のように具体化され、展開されてきたかを念頭におきながら本書の構成と内容を紹介し、筆者の所感を述べさせて頂きたい。

第I篇「日本人はいつ・どこから来たか」は本書の導入部にあたり、自然人類学や文化人類学、考古学や歴史学などの成果を授用して日本人の源流と小進化を概観している。このテーマは従来の日本歴史地理ではほとんど取り扱われてこなかったもので、著者が構想する日本歴史地理のスケールを示すものといえよう。この点に関連して著者は、日本を歴史地理から考えるのは「日本に人間集団が生活をはじめ、そのために生活空間をつくりはじめた時点」からであり、「日本においては曲り角に立っている紀元20世紀末までの地理的事象を考察することになる」と明言している(27頁)。浅学非才な筆者には、後段の部分について、いわゆる「地理学」、ことに「人文地理学」との関連が気になるころではある。

それはともかく、第I篇の最終節は「日本歴史地理の時代区分」にあてられ、そこでは人間集団の地平の拡大、すなわち空間知覚の広さを変革した時点をもって画期とするという観点から、1氷河時代一大陸と列島、2東アジア地中海時代、3世界市場時代という三大時代区分を提起している。

続く第II篇「日本はアジア東海の島嶼国家として発展した」は、三大時代区分のうち氷河時代を扱う第1部と、東アジア地中海時代を扱う第2部とからなっている。内容以前の問題として、「島嶼国家」という表現は如何なものだろうか。「島嶼国家」の誤植にすぎないとも思えるが……。

第1部「人類の渡来」は「氷河時代一大陸と列島」と題する1章のみで、氷河時代の東アジアにおける海陸の変化を概観し、日本列島の旧石器時代が2つの石器圏から構成されていたことを述べるにとどめている。

第2部「狩猟社会から農耕社会へ展開」は、それぞれ縄文時代、弥生時代、古墳時代に対応する3章に分けられ、第一章では縄文式土器の地域差や縄文期の集落生活圏を扱って④を具体化している。第二章では②の観点から弥生時代を漁撈・交易民として、東アジア一帯の沿岸や島々で活動していた倭人の日本列島への植民時代としてとらえ、照葉樹林文化や稲作の伝播、集落立地の変化から邪馬台国問題までを概観し、第三章では④の立場から大型古墳の伝播を略述した後、「古代人の歴史心理—風水思想」の

一節を設けて③を論じている。しかしその大部分は風水思想の解説に費され、その具体例としてあげられているのが古代の首都であるため、この節を古墳時代を扱う章に含めた著者の意図が判然としない。

「東アジア地中海圏の中の古代国家」と題する第3部は、古代国家の地域体制と辺境政権を扱う第一章と、産業地域と物資流通圏を扱う第二章とで構成され、前者では畿内七道や国郡里制、首都・国府・郡家や蝦夷政権が、後者では条里型水田と村落、貢租と特産地の形成、官道と物資流通圏、日潮・日唐の交易が論じられている。これらの中で特徴的なのは、物資の流通や交易に比較的多くの紙数をさいて②④の視点を明示し、随所で③⑤の観点からの叙述がみられる点で、著者の意気込みを感じさせるが、例えば古代日本を東アジア世界の一環に位置付けたことが、古代日本の空間構造のあり方にどのように反映しているのか、あるいは著者が設定した古代日本の空間構造が国郡里制や国府・郡家、条里型水田や村落の地域差とどうかかわっているのかといった点については、ほとんど論及されていないことが惜しまれる。

いわゆる中世の歴史地理を扱う第4部には、「東アジア交易圏における日本の発展」というタイトルが与えられ、第一章「荘園と集落」、第二章「産業・交通の発達と水軍の発生」、第三章「東アジア地中海の諸国の貿易」という章立てからも容易に知られるように、交通や交易を主軸にした叙述が一層強められて、著者の歴史地理学観を鮮明にしている。この時代は既往の歴史地理学的研究が乏しい時代であり、それだけに著者の構想を自由に展開できたものであろう。

三大時代区分の最後、世界市場時代を扱う第III篇「日本是世界市場の経済大国に発展した」の冒頭には時期区分のための1章が設けられ、日本が第一次ウェスト・インパクトをうけた16世紀から19世紀中葉までを前期、第二次ウェスト・インパクトがはじまった安政開国以降を後期とし、「前期は農業型社会であり、後期は工業型社会である」と述べている。安政開国を画期としたのは一つの見識ではあるが、これ以降を工業型社会と規定するならば、むしろ産業革命以降を後期とする方が妥当だとも思える。

第1部「前期—農業型社会の発達」は6章に分けられ、64頁を費して本書の中核部分を構成している。まず第一章では人口増減の動向と都市人口の規模を

論じて導入部とし、第二章では幕府領と大名領の配置、石高制一検地と年貢、古村の地域構造、農民層の分解と労働力の給源の4節によって幕藩体制の地域構造を概説している。その叙述は一般論や制度論が中心で迫力を欠くが、新田開発と水利を扱った第三章はさすがで、新田開発の動向とその意義、水利技術の発達と地域的展開、新田の水利慣行が鮮やかに論述されている。

第1部の後半は、第四章「産業地域の発達」で産業地域の構造、織物産地の発展、イワシ漁業地を全国的視野から論述し、水陸交通網の整備を扱った第五章「交通一陸運と海運」を経て、第六章「城下町と藩領流通圏」へと展開し、全国市場圏にまで説き及んでいる。空間構造と空間過程に重点を置くという著者の構想が美事に生かされている部分であるが、著者のもう一方の柱である歴史心理の方は影が薄くなっている。

安政開国以降世界市場の一環に組み込まれて成長していった近現代の日本を扱った第2部「後期一工業型社会の展開」は、人口の爆発的増加と巨大都市の出現、世界市場における日本貿易、日本産業の近代化の3点に絞って、日本を世界の中において考察している。その到達点が「曲り角に立つ日本」と題された終章で、「すでに現在は過去になりつつある。一つの時代は終ろうとしているのである。この工業型社会の空間過程は過去の地理になりつつある」という認識が示されている。

巻末に収録されている「歴史地理学とは何か」は、前著歴史地理学方法論で詳論された著者の歴史地理学観を簡潔にまとめたもので、本書の理解を一層促進する働きを有している。

以上を通読して感じられるのは、本書が著者の個性、あるいは独自の歴史地理学観をかなり強く打ち出した概説書であり、この点で既往の概説書とはかなり性格を異にしているということである。このことは、一人の著者によって書かれた概説書の大きな特色でもある。その可否を判断するためには、筆者の方にこれに対置しうる歴史地理学観、それも1冊の概説書を構成しうるほどのものが必要となる訳だ

が、残念ながら今の筆者にはその準備がない。

それはともかく、本書のはしがきで著者は、「大学の一般教養のテキストとして、あるいは入門の教養書として、日本歴史地理がいかに展開したかを概観できるところの著書は少ない。小著はそのようなものの一冊として執筆したものである」と述べている。著者のこの目的は、本書によって、かなり個性的なものを打ち出しつつも、ほぼ達成されていると考えられる。

しかしながら一方では、本書がこのような意図で書かれたものであるならば、近年の歴史地理研究の焦点となり数々の優れた論考が発表されてきたテーマ、例えば古代の地域計画や条里制の地域的展開とその差異、中世における村落の形態的・質的变化や地方都市の発達、近世城下町の地域構造や近世村落をめぐる諸問題などについて、もう少し具体的に取り上げ、本書の筋道の中へ位置付けてその意義を論じてほしかったとも思う。

また本書の中には、大和川を木津川と記したり(60頁)、成務朝の国造制に長岡京時代の791年という注記をしたり(79頁)、あるいは近江国大津を寺内町に数え、山城の山科を摂津国と記す(126頁)など、明らかな事実誤認がところどころに見られ、校正ミスによる誤植も少なくない。これらは、その可否を判断する能力を未だ有しない入門者の理解を混乱させることになりかねない訳で、もう少し慎重な配慮が望まれる。

とはいえ、本書のような概説書を得たことは日本の歴史地理学界にとっては記念すべきことであり、自己の専門領域を越えた広範な文献渉と該博な知識、確固とした歴史地理学観に裏付けられ首尾一貫した論述を必要とする概説書の執筆という、困難な仕事を見事に完成された著者に深甚の敬意を表する次第である。本書が歴史地理学のみならず、地理学や歴史学、さらには日本という地域や国土に関心を有する多くの人々によって読まれ、日本歴史地理への認識が拡大することを期待するとともに、本書を契機として本書に対置しうるような概説書の刊行を待望したい。(小林健太郎)